

ジャズはまるで東北弁!?

名雪 祥代

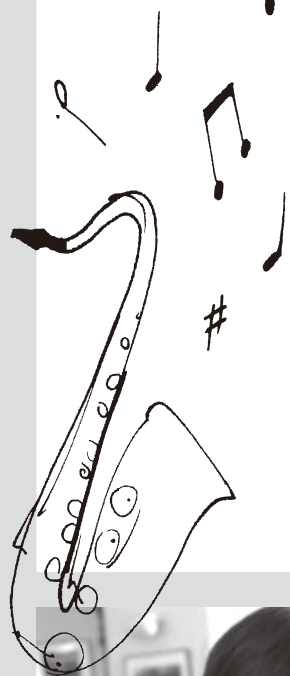
私は現在ジャズサクソフレイヤーとして東北を拠点に活動していますが、かつては音楽大学でクラシックを学んでいました。仙台に移り住んだ時、定禅寺ストリートジャズフェスティバルで皆が楽しそうに演奏する様子を見て「これからは楽しいと思える音楽をやっていこう」とジャズプレイヤーに転向することを心に誓ったのでした。

ジャズを研究し始めて気づいたことの一つは、言葉と音楽の関係は密接ということでした。ジャズはアメリカで生まれた音楽で、英語のイントネーションと深く関わっています。アクセントが2、4拍目(第2、4音節)にくる事や、リズムや旋律が1拍目から始まっていないことが多いというのも特徴です。ざっくり言うならば休符「ん」から始まることが多いのです。

これを理解するために(分かりやすく生徒に伝えるために)何かいい方法はないかと考えていたある日、ピンとくる言

葉を発見!宮城弁でよく使う「そうだね」を意味する「んだっちゃ」が、見事に♪♪(シンコペーション)のリズムと合致、東北弁とジャズは、似た部分があるのではないかと、ということに気づきました。それ以来、捉えにくいリズムは日本語を当てはめてしゃべるようにすると、あら不思議!音符を読むのが苦手な生徒さんも吹けるようになる、ということが続出したのです。例えばジャズの巨匠ソニー・ロリンズの「オレオ」は、「んだっちゃねー、んだっちゃねー」というメロディーで始まり、「テイクファイブ」のリズムは「んだっ、んだっ」としゃべるようにすればしっくりきます。言葉と音楽は本当に密接だなあと感じる日々です。

「んだっちゃ」という言葉の地方に生まれてよかった、ジャズと出会えてよかったと、言葉遊びのようにジャズと方言を当てはめては、今日も1人くすすと微笑むのでした。



名雪祥代 (なゆき・さちよ)

アルトサクソ奏者

宮城県美里町出身。昭和音楽大学及び大学院(神奈川県)でクラシックサクソを学び、読売新人演奏会出演や、昭和音大オーケストラのコンチェルトソリストを務める等、クラシックプレイヤーとしての研鑽を積んだ。2004年に仙台市に転居。定禅寺ストリートジャズフェスティバルを見て感銘を受け、ジャズへの転向を決意。ジャズプレイヤーとしての道を歩み始める。2016年9月自身の初リーダーアルバム「Comfort」を発売。翌日のAmazonランキング(J-JAZZ部門)で第1位を獲得。東北4公演、大阪、東京公演で満席の客席を沸かせた。さらに、飛行機AirDoで自身のオリジナル曲「Nostalgei」(CD「Comfort」より)が番組で採用された。その演奏は、正確なサクソフォンの奏法に裏付けされたテクニックと、歌心溢れる女性的な表現力、男性的な力強いサウンドの両方を併せ持つと定評がある。2018年4月からNHKラジオ第1「ゴジだっちゃ」(仙台放送局)水曜日パーソナリティとしてレギュラー出演中。今、宮城県内外、東北各地、さらには全国にむけてジャズを発信し続ける注目の女流サクソプレイヤー! 2019年7月、プラザの座席「名雪祥代のJAZZ講座」の講師を務めた。



日常を捨ててプラザへ出よう

渡辺 明

映画、小説、宝塚、音楽、美術工芸の好きな両親の影響を受け、芸術表現に興味のあった私の選んだのが、合唱と演劇。若い頃から高齢者となった今まで、精神の孤立を防ぎ、多くの人と繋がれる大切なもの。

女子高との交歓会をします、に釣られて入った男声合唱クラブ。声は良くなるけども合唱ならば恥ずかしくないか。十代から五十年以上も歌い続けている。

馬齢を加え図々しくなり、自分一人の声を聞いてもらいたくなった。人前で話すのが不得意でもありその克服のため挑戦したのが演劇。フレンドリープラザ演

劇学校1期生となる。

合唱、演劇、読書まで充たしてくれるのが川西町の文化の殿堂フレンドリープラザ。先の7月14日には朗読倶楽部『星座』公演、宮沢賢治「土神ときつね」で自分の素に近い土神の役を演じた。来る9月7日にはフレンドリークリニックの合唱講座に参加。いつもの自分でのだけではつまらないから。(米沢市)

物語と現実の間^{あわい}

加藤 美紀

物語が好きだ。

それは、SFやファンタジー、歴史物に問わず、本を開き文字を目で追ううちに、ここではないどこかへ、私ではない誰かへ…周りの音が遠くなり、目に入っているはずの本以外のものたちが見えなくなる、その感覚がたまらない。

どれだけトリップさせてくれるか、その本の好き嫌いは極端な話、その一点だけのような気もする。静かな場所より少

し騒がしいところでの読書が好きなのもきつとそれが理由だ。

電車の中、ふと文字から目を離し別世界から現実に戻る。「ここはどこなんだろう」。窓の景色を覗き場所を確認するまでの数秒間の心細さ。孤独感。没頭していた世界から自分だけが弾かれるさみしさ;そしてまた文字に目を移す。

脳の集中と散漫の繰り返し私にとっては究極の癒しなのだ。

そんな私が20代に猛烈に没頭した物語、小野不由美の「十二国記シリーズ」が、長編では18年ぶりに今秋発売が決定している。内容を語り出したら文字数が足りないのではやめておくれ、私だけが待ち望んでいたわけではないことは、本屋での「十二国記シリーズ」の取り扱いで充分伝わってくる。新刊をここまで楽しみに待つのも何年ぶりだろう。

いま、過度な幸福感を持って余している。

(米沢市)

